

自己の事故

鈴木はる香

私の目から音が消えた
周りが光の棒を振り回している

瞼を持ち上げたら、光が少し混じった黒い墨の空気が入ってくる
終わっちゃった。

今この詩を書いているあなた
下にある私の頭の近くを、音に合わせるはずの棒で照らしてた
私はきつと針で裂かれた頭

今この詩を書いているあなた
頭のネジを外して体を揺らしてた
私はその時使い物にならない身体

今この詩を書いているあなた
憐れみの目で粘土をつくる
私はあなたの詩の道具

とつくに切られたテープで巻きつけて、それで脳味噌の鍵穴に通す
ことを試みる
みみみみみみみみみみみみしか聴こえない耳
言葉に羽が生えないずっとここらへん最近ずっと

炊飯器から香る匂い、変じゃない？
暑さに犯された匂いだけは分かる鼻

部屋の黒い壁に映る手の影でひとり遊び
もうこんな時間だよって知らせてくれるのは
冬物のコートが掛けられている頭上だけ